



TITLE:

19世紀フランスにおける女子修道院寄宿学校(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山内, 由賀

CITATION:

山内, 由賀. 19世紀フランスにおける女子修道院寄宿学校. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21852>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	山内 由賀
論文題目	19世紀フランスにおける女子修道院寄宿学校		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、19世紀フランスにおける女子修道院寄宿学校の隆盛と衰退のプロセスを女子中等教育の変化に関連づけながら明らかにしたものである。</p> <p>まず序章において、先行研究の概要が示され、本論文の研究目的や研究方法が提示されている。</p> <p>次いで第1章では、女子修道院寄宿学校の誕生から、第二帝政期の隆盛に至るまでの歴史的背景がたどられ、女子修道院寄宿学校と女子教育をめぐる政治的、社会的状況を整理しながら、女子修道院寄宿学校が当時の社会や女子教育とどのような関係性を築いていたかが明らかにされている。学位申請者によれば、17世紀に誕生した女子修道院寄宿学校は、フランス革命による修道院の閉鎖を乗り越え、第二帝政期に隆盛期を迎えたが、それは、女子教育に対する公的支援および制度が欠落していながら、女子に対する宗教教育が求められていたためである。キリスト教的価値観によって育成された女性が社会的に要望されていたがゆえに、カトリック教会は女子教育への支援を積極的に行ったということになる。</p> <p>第2章においては、19世紀を代表する女子教育修道会であるウルスラ会と聖心会が取りあげられ、両修道会が作成していた『規則集』と『学習計画』の分析を通して、寄宿生活の様子が明らかにされている。また学習内容についても具体的に検討されており、19世紀を通じて、男女によって教育目的や教育内容が異なっており、女子修道院寄宿学校の採用科目の中でも積極的に教授されるものとそうでないものの偏りがみられたという。そして性別によって教育目的や教育内容が違うだけでなく、たとえば「競争」と「褒賞」という教育システムも、男子教育におけるそれは生徒たちを序列化するためのものであったが、女子教育では生徒の品行や宗教心の涵養のために導入されていたことが指摘されている。ただこのような男女による教育の違いはあったものの、女子修道院寄宿学校では知育を意識した教育が実践されており、19世紀を通じて女子の嗜みとされていた「針仕事」は、将来の生活の手段になる経済的利点に加え、教会装飾や慈善活動にも役立つという宗教的な側面を有していたと、学位申請者はとらえている。</p> <p>第3章では、女子教育と宗教との結びつきが論じられている。学位申請者によれば、女子修道院寄宿学校での教育の根幹には宗教教育が存在しており、宗教教育は生活を通じた信仰心の涵養のみならず、授業の題材として知育の役割も果たしているものであった。さらに女子修道院寄宿学校は、生徒たちが学業を終えた後も生徒たちとつながりを保っており、卒業生たちの信仰生活を指導するものとして機能していた。このような女子教育と宗教との関係性は女子修道院寄宿学校だけに限るものではなかったが、それというのも、社会にあっては女性の道徳は宗教によって形成されると考えられており、フランス革命の宗教否定によって女性の道徳が低下したという危機感が宗教教育の必要性を強化させていたからである。このことは社会の再キリスト教化をめざすカトリック教会の狙いと一致するものであり、女子修道院寄宿学校での女子教育はカトリック教会の支援のもと社会の需要を満たしていたのである。</p> <p>第4章においては、女子修道院寄宿学校が隆盛を極める一方で、19世紀半ばには世俗社会でも女子教育をめぐる議論が活発化してきたことが取りあげられ、皇后ウジェニーと公教育大臣デュリュイの女子教育改革が考察されている。そして学位申請者は、ウジェ</p>			

ニーとデュリュイによる女子教育への尽力が女子教育の世俗化および高等教育への接続に向けた試みであり、第三共和政期に続く女子教育の非宗教化への流れを形作るものであったと位置づけている。

第5章では、1880年の女子中等教育法(通称カミーユ・セー法)の成立までの議論を検討することを通して、女子教育がカトリック教会という宗教に深く依拠しながら発展してきた社会において、なぜ宗教と女子教育の別離がめざされたのか、非宗教的な女子教育はどのような理論でもたらされたのかという問題が考察されている。そして反教権主義の一環として設立された国公立女子リセ・コレージュに対抗すべく、女子修道院寄宿学校がどのような対応を行ったのかも検討されている。すなわち女子修道院寄宿学校では、修道女たちが教員免状を積極的に取得して生徒の獲得に努め、また資格試験への対策を行うなど、学校存続にむけてさまざまな策を講じたこと、また宗教教育を前面に押し出すことで女子リセ・コレージュに対抗し、その結果として、女子修道院寄宿学校はゆるやかな衰退をみせつつも、その需要は消滅しなかったことが指摘されている。

最後に終章においては、各章で得られた知見が整理され、全体の総括が行われているが、学位申請者は、女子修道院寄宿学校がカミーユ・セー法という女子教育の制度化への一通過点として評価されるべきものではなく、現代に通ずる女子中等教育を形作るものであったと結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

女子修道院寄宿学校とは、カトリック教会の共同体である女子修道会によって運営されている修道院に附属した、女子のための寄宿教育施設のことである。フランスでは男子教育が早くから国家の管理下におかれていたのに対して、女子教育の公的中等教育制度は、第三共和政下の1880年に成立した女子中等教育法(通称カミーユ・セー法)まで待たなければならなかった。それまでの女子教育は、貴族・ブルジョワ階級の女子に対する限定的なものであり、しかも彼女たちに対しても修道院または世俗の寄宿学校といった教育施設、あるいは家庭での母親による教育という、僅かな選択肢しか用意されていなかった。女子修道院寄宿学校は、17世紀に端を発する伝統的な教育形態であり、19世紀には貴族・ブルジョワ階級の娘は女子修道院寄宿学校に入り、そこでカトリック規範に基づく教育を完成させるのが一般的とされていた。にもかかわらず、これまでの研究においては、女子修道院寄宿学校は等閑に付され、あたかも19世紀後半までフランスには女子中等教育が存在しないかのように論じられてきた嫌いがある。本論文はこのような研究状況に果敢に挑み、女子修道院寄宿学校がフランス革命後の社会においていかにして女子教育の主たる担い手となり、隆盛に赴いたのか、そこにはどのような社会的需要が存在していたのかを論じたものであり、まさにこの点に本論文の第1の意義が存在する。そして学位申請者は、女子修道院寄宿学校の隆盛の背景として、カトリック教会がフランス革命後の社会の再キリスト教化をめざしており、その宗教的基盤によって経済的にも社会的にも安定した学校経営ができていたことと、社会もまたキリスト教的価値観によって育成された女性を望み、女性に対して宗教教育を行うことを求めていることを指摘している。

このように、女子修道院寄宿学校は19世紀に女子教育機関として確固たる地位を築いたが、そこではどのような教育が行われ、生徒たちはどのような生活を送っていたのだろうか。このことをウルスラ会と聖心会が作成した『規則集』と『学習計画』をもとに明らかにしたことが、本論文の第2の意義である。女子修道院寄宿学校というと、濃密な宗教教育と厳格な生活規律がまず思い浮かぶが、学位申請者によれば、教育の根幹に宗教教育が存在し、宗教心の涵養がめざされていたことは当然であるとしても、宗教教育の題材に基づいて知育にも力を注いでいたという。また女子の嗜みとされていた針仕事の習得は、教会装飾や慈善活動に役立つという宗教的な側面ばかりでなく、没落の可能性がある、不安定な状況を生きる貴族たちにとって、娘に将来の生活に備えさせるための経済的手段という側面もあったことが指摘されている。

そして本論文の第3の意義は、女子修道院寄宿学校の隆盛ばかりでなく、衰退のプロセスをも論じた点にあり、女子教育が国家と宗教のヘゲモニー闘争の場となり、国公立の女子リセ・コレージュに対して、女子修道院寄宿学校がどのように対抗していったのかが論じられていることである。そもそも1880年のカミーユ・セー法と女子リセ・コレージュの成立は、反教権主義の一環として存在しているが、宗教権力と結びつくことで発展してきた女子中等教育に大きな変革を迫るものであり、以後フランスでは非宗教的な女子教育が展開していくこととなった。このような状況に対して、女子修道院寄宿学校は、学校存続に向けてさまざまな策を講じ、宗教教育を前面に押し出していったのであり、女子リセ・コレージュは女子教育の支配的モデルとはならず、女子修道院寄宿学校はゆるやかな衰退を見せつつも、その需要は消滅しなかったことが論じられている。

このように、本論文はこれまで本格的に研究が行われてこなかった女子修道院寄宿学校を俎上にあげ、その隆盛から衰退に至る歴史を描いたものである。そのことを通

して本論文は、フランスにおける女子中等教育の制度化、いわゆる女子教育の公教育化に至る過程に女子修道院寄宿学校を位置づけなおし、ネガティブな評価を付されてきた女子修道院寄宿学校に新たな意味づけを与えたといえるだろう。ただ、もう少し史料の裏付けが欲しい個所があり、さらには社会的コンテクストを重視し、概念の整理を行うことで、より重層的な叙述が可能となると思われる個所もある。本論文にはこのような不十分さが存在しているが、もちろんこれらは今後の研究のための課題として残されたものであり、これによって本論文の価値が損なわれるものではない。

よって、本論文は、共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であり、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成31年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降